



瓦が崩れ落ちた民家（宇城市中心部）



ビニールシートで覆う屋根が目立つ宇城市の住宅街

「平成28年熊本地震」被災地支援へ

4月14日から熊本・大分両県を中心に続いた大地震「平成28年熊本地震」は、両県に甚大な被害をもたらしました。相次ぐ余震、物資の不足、健康被害などの不安の中にある被災者を支援しようと、震災発生以降、全国各地から被災地への支援活動が行われ、その活動は本格化してきています。鹿屋市も様々な分野での支援活動を開始しました。

【市安全安心課（3階）】 ☎0994311224

地震発生後間もない4月16日から、熊本県内で配水管の破損による断水や水源の汚濁等が発生しているとして、鹿屋市は上下水道部所有の2トン給水車1台と職員を熊本市内へ派遣し、給水活動に当たりました。

4月18日には、大隅半島4市5町（鹿屋市・垂水市・志布志市・曾於市・大崎町・東串良町・肝付町・錦江町・南大隅町）で構成する「大隅半島4市5町復興支援チーム」（会長・中西茂鹿屋市長）が結成され、共同して被災地への物資支援・職員派遣・一時避難者の受け入れ等を行うことが決められ、早速4月21日から熊本県宇城市役所へ向け支援物資の発送を行いました。4

月23日からは4市が宇城市役所へ、5町が同県御船町役所へ罹災証明発行業務の支援等を行う職員の派遣も開始しました。

また市は被災住宅調査の支援のため、4月22日から同県甲佐町へ、5月3日から熊本市へ建築技師を派遣しました。4月27日からは、熊本県内の被災自治体の業務負担を軽減するため、市は熊本県の自治体が行う「ふるさと納税」事務の代行も行っていきます。このほか、多くの市民の皆さんからの義援金や物資の提供などの支援はもちろん、市内の様々な団体による物資支援や現地での炊き出しなどのボランティア活動も広く展開されてい

ます。5月下旬には下水道課職員の熊本市内への派遣も予定しています。被災者の避難生活が長期化するれば、市は今後も継続して支援活動に当たります。



次々に届けられる支援物資（宇城市役所）



支援物資の配給を待つ被災者（宇城市保健福祉センター）

熊本地震への義援金の受付を行っています



市では、4月14日から続いた「平成28年熊本地震」の被災者を支援するため、義援金の受付を行っています。

◎義援金箱設置場所

- 市役所本庁1階ロビー
- 各総合支所1階入口付近
- 分庁舎（上下水道部）1階入口付近
- かのやばら園入園口及び西口

◎受付時間＝平日の8:30～17:00

※領収書が必要な場合は、市安全安心課に現金を直接持参してください。

震災復興支援

～おおかなと大船渡市への派遣を終えて～

震災と言えば、思い起こされるのは5年前に起きた「東日本大震災」。鹿屋市は、東北の復興支援として、平成25年4月から岩手県の大船渡市役所に職員を派遣。今年4月、大船渡市役所での3年間の任期を終え、鹿屋市役所に帰任した栗脇幸仁主査に、大船渡市で行った支援活動や災害への備えなどについて聞きました。

被災地派遣への志

平成13年に土木技師として入庁し、12年間培ってきた経験を生かして東日本大震災の復興に少しでも貢献したいと考えたのが派遣に応募した動機でした。大船渡市役所には、70のような派遣職員が全国から170～80人いて、様々な分野の業務に当たっていました。

漁港等の復旧を担う

大船渡市役所では水産課に所属し、津波や地震による地盤沈下で被災した漁港施設や防波堤の復旧に従事。市が管理する16漁港のうち3漁港と、7か所ある津波防波堤のうち1か所の整備を担当しました。

長期間の復旧工事

災害復旧は津波による倒壊への対応だけでなく、地震によって起きた広域の地盤沈下に対する高上げも必要です。一見被災していないように見える港湾・漁港施設も満潮時になると水没し、施設の機能を果たせない状況にありました。

ただ漁港施設は、使用する漁業者と係船場所を調整しながら工事を進めなければなりません。これは施設を新設するよりも長い工期が必要でした。

また、派遣1年目の秋から担当した防波堤も、三陸復興国立公園内や名勝・天然記念物である海岸に隣接していたため、風致保護等の協議に多くの時間を要し、設計から協議、工事着手

大船渡市



市道路建設課 栗脇 幸仁 主査（40歳）

までを手掛けるとなると、どうしても3年間の派遣期間が必要となったのです。

結局、担当した3漁港のうち1漁港のみの復旧に終わりましたが、残りの2漁港は今年6月末に復旧し、防波堤も7月末には完成予定です。

復興の兆し

派遣1年目は、がれき撤去後の広い土地と、数珠つなぎの工事用車両が印象的でした。

2年目になると、高台集落移転の造成工事で搬出された土砂の山と、防波堤工事に使う大型重機が密集して作業を行っている姿が見られるようになりまし

た。

そして3年目には、高台移転先の造成等もほぼ終わり、住宅を再建された被災者が少しずつ仮設住宅を離れ、新しい生活を営んでいました。

私の住んでいた仮設住宅も鹿屋に帰任する直前には、私たちが家族を含めわずか2世帯となり、寂しくもありましたが復興の兆しを感じました。

今年3月13日には、大船渡駅周辺で「第1期まちびらき」が行われ、復興後の「まちの顔」となる区域の門出を祝いました。今後、同区域内にホテルやショッピングセンター等が営業を開始し、復興に向けた動きが加速するものと思われます。

災害への備え

豪雨、土砂崩れ、地震など、さまざまな災害がありますが、それは他人事ではなく、いつ自分たちの身の上に起こるか分かりません。

大船渡市の知人たちが震災後に実践しているのは、避難場所や避難経路の確認と、自宅や車に1人当たり2～3日分の水と食料等を備蓄することです。私も、万が一に備え、水と食料、ラジオ等の防災用品を大船渡でそろえました。この備えは鹿屋に帰ってきた今でも実践し続けています。

4月14日に発生した熊本・大分両県を中心とする地震災害の惨劇を見て、災害への備えへの大切さを改めて痛感しています。



※平成28年4月からは林康隆主任技師（37歳）を大船渡市へ派遣しています。